

# 琉球大学学術リポジトリ

## [抄録] サトウキビクキハナバエの生態

メタデータ	言語: 出版者: 沖縄農業研究会 公開日: 2009-01-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 東, 清二 (抄録) メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/0002015271">http://hdl.handle.net/20.500.12000/0002015271</a>

## サトウキビクキハナバエの生態

渋谷正健・田中章：鹿児島大学農部紀要7（4）：137～147

本虫は1964年、鹿児島県枕崎で芯枯れとなったサトウキビの芯部から採集され、1968年に大英博物館のA.C. Pont博士により記載されたサトウキビの新害虫である。本虫は鹿児島県と沖縄本島の今帰仁（糸満町三和）からも、抄録者追加）から採集されており、サトウキビの他にススキおよびイネ科の雑草一種にも寄生する。

実験室内の経過は卵期間が2～5日、幼虫期間が4月に11～26日、5月に12～22日、6月に9～14日で、蛹期間は7～14日であった。定温下での1世代期間は15°Cで74.5日、20°Cで29.6日、25°Cで25.7日、30°Cで21.0日であった。成虫の寿命は春夏季よりも秋冬季に長い。

まためすはおすよりも長く、春～夏季のめすの平均寿命は33.7日、おすの平均は18.7日であった。

野外ではアブラムシ類が分泌する蜜を食物としているようである。鹿児島では老熟幼虫で越冬し、第1世代目の成虫が4～5月に第2世代が6月に、第3世代が7月に第4世代が8月から9月にかけて、第5世代成虫が10月から11月に羽化する。

卵は若いサトウキビの各部に産下されるが主として葉耳の内側に1卵ずつまたは時に1個所に10卵も産下される。ふ化した幼虫は新芽の部分からサトウキビ内に侵入し、その部分を食して芯枯れとなす。（抄録 東清二）